

黙示録の記録

第 13 章

邪悪な三位一体

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

第10章 甘くて苦い相続

第11章 創造主の二人の証人

第12章 長い期間にわたる闘争

第13章 邪悪な三位一体

第14章 永遠の福音

第13章 邪悪な三位一体

黙示録

13章は黙示録のもう一つのカギになる章です。終わりの時に起こる最も華々しい出来事で非常に大切な役割を果たす二人の邪悪な人が現れると書かれています。そして、彼らは、ネロから毛沢東に至るまでの専制君主的な指導者たちが長い間継続して用いてきた抜け目の無さと邪悪さすべてを具体的に現しています。彼らはこの章では共に獣と呼ばれており、後で、出て来る第二の者も「偽りの預言者」と呼ばれており、共にサタン・年を経た竜から彼らの際立った才能と権力を受けています。多くの著者はこの邪悪な三つ組と聖なる三位一体の類似性に注意しています。竜と獣と偽りの預言者は、ほとんど意図的に御父、御子、御霊に対応して用いられている各々の偽物のようです。いずれにせよ、これら三つは、強情で悪意に満ちており、創造主を御座から引きずり降ろし、聖なる御使いを滅ぼそうと死力を尽くし、最大限の努力をします。

罪の人

勿論、これら邪悪な人々の第一の者は既に黙示録11章で取り扱われており、獣は、創造主の二人の証人を殺し（黙示録11:7）、全権を掌握し患難期の終わりの42カ月君臨します（黙示録11:2;13:5）。彼は初期の預言にもしばしば言及されており、ダニエルは彼を『来るべき君主』（ダニエル9:26）と、イザヤは「悪しき者」（イザヤ11:4）と、キリストは、彼を「荒らす憎むべき者」（マタイ24:16）と呼んでいます。使徒パウロは彼を「不法の者、すなわち、滅びの子」（Ⅱテサロニケ2:3）、と指摘しており、恐らく彼の肩書すべての中で最も決定的でふさわしいものです。

黙示録13章1節　そして彼は海辺の砂の上に立った。また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神（創造主）をけがす名があった。

ヨハネは、天にある二つの偉大なしるし、言わば、長い間続いた女と竜の間の闘争に目を止め注意深く目を凝らしながら見えています。しかも、彼があなたかも海辺の砂の上に立っているようです（そして、彼は海辺の砂の上に立った。黙示録12章18節）。そして今や第三の大きいなるしるしを、海の上で見ているようです。たとえ、今回は「しるし」という言葉が用いられていないとは言え、前後関係のすべてから、その光景は明らかに象徴的です。竜の印との繋がりは、「七つの頭と十の角と七つの冠」（黙示録12:3）を持つ竜の描写とここ黙示録13章1節にある

獣の描写との比較で明らかです。

しかも、海から昇って来る獣は、たとえ外観が同じでも竜と同じではありません。竜はサタン（黙示録12:9）で、一方獣は人です（黙示録13:8）。それにもかかわらず、その類似性はあきらかに重要で、獣と竜の性質と目的と活動が同じであることを強調しています。実際に、前者・獣は、特に、彼の力と地位と権威を後者・竜から受けたと述べられています（2節）。

もし海からの獣が象徴的なら、海も象徴的はずです。聖書で海は、特に規定されていない限り、通常イスラエルの西の大海、すなわち、地中海を指します。ヨハネは海；からの大きいなる怪獣、馬の頭を持った首長竜のような怪獣が、彼が立っている海辺の近くのこの海の深みから昇ってくるのを見えています。

最初、獣と竜との類似性はヨハネに恐らくイザヤの預言を考えさせたことでしょう。そこで、聖書は「逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタン・・・海にいる竜」（イザヤ27:1）とレビヤタンについて語っています。しかし、それから、ヨハネがもっと近づいてみると、ヨハネは、獣が完全に竜とは異なっている事が分かりますが、むしろある種の陸生哺乳類の奇妙な混成獣のようです。地中海から昇ってくる陸生哺乳類は、ただ地中海周辺の陸地の人々の中から出現する何か強力な個人について語っていると取る事が出来ません。そして、その人は、獣の混じり合った特徴を持っていて、なんとなく彼らすべての産物であることを示唆しているのです。☆☆☆☆

ダニエルの幻の獣たちに対し恐ろしいこの獣の明らかな類似性は、ここでの「海辺」が海の周りにすむ陸地の人々を指す（ダニエル7:3と7:17を比較せよ）。十分な裏付けなのです。七つの頭と十の角は明らかにこの獣を竜に結びつけますが、混じり合った動物の身体は、ちょうどダニエル七章の四つの獣とその獣が同じと見るべ

きだと示唆しているのです。

ダニエルの幻は、四つの獣から成っていて、覇権を得るために努力している四つの偉大な国を表わしています。最初の獣はライオンのようで、第二の獣は熊のようで、第三の獣は彪（ひょう）に似ており、第四の獣は名のつけられていない獣であったが、非常に強い。ダニエル書の7章7節の最後の動物は、黙示録13章1節の獣と同じ獣のように思われます。黙示録の獣とダニエルの幻の獣を同じと見做すための力ギになる要点は10の角にあります。

ダニエル7章の四つの国と黙示録13章の七つの頭と十の角は、共に際立った冒瀆的言葉を発する者・サタンの支配下にある国々と指導者たちの複合体を必然的に組み込んでいるように思われます。それゆえ、名の無い名前が各々の頭に刻み込まれ、ただ人を神として崇めるように計画され、それによって、真の創造主の御名を汚しているのです。

黙示録13章2節 私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口はししの口のようにであった。竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。

ヨハネはその重要なしるしが展開している時に、それを目撃していた事を私たちに再び思い起こさせます。ヨハネはそれに触れていないけれども、彼が見た獣は少なくとも部分的に、ダニエルが見た獣の合成物である事をより明らかにしています。ヒョウの身体で、熊の足、そしてライオンの口を持っているこの獣は明らかにダニエルの獣の性質にあずかっています。こうして、この節を理解するために、私たちはまずダニエル

の記事を理解しなければなりません。

ダニエル7章の4つの獣を解釈する通常のやり方は、ダニエル7章の4つの獣をバビロニヤ、メドペルシヤ、ギリシヤ、ローマと順序正しく歴史上の帝国として、解釈するのが一般的です。これはダニエル2章のネブカドネザルの夢の像の四つの部分の意味に細かい点で一致しています。事実上、実際に聖書学者は皆これに同意しています。そして、ダニエル7章の前後にある章は、少なくとも最初の三つの帝国に関する限り、そして、ネブカデネザルの像に関する限り、それが確かであることを示しています。

しかしながら、ダニエル7章の獣に対し同じ解釈を当てはめるのは困難です。彼らは順次現れるけれど、四つのけものは引き続き起こると言うより同時に存在しているように思われます。まず、四つの獣は「私が夜、幻を見ていると、突然、天の四方の風が大海をかき立て、」(ダニエル7:2)との対応する陳述に調和して現れます。さらに、すべての四つの獣は、終わりまでお互いに最後まで頑張り続けます。事実、第四の獣が「からだはそこなわれて、燃える火に投げ込まれる」後まで、最初の三つの獣のいのちは、「その時と季節まで延ばされた」(ダニエル7:11, 12)。たとえあの時は、バビロンは、既に倒れてしまっており、メドペルシヤが優勢になっていた時とはいえ、四つの獣すべては、結局、ダニエルが書いた時よりはるか未来の事であった(ダニエル7:17)。

こうして、ダニエル7章の四つの獣は、東西南北から一つずつ四つの風が海とせめぎ合うように、四つの大帝国(または、同盟国の可能性もある)を代表している可能性があるように思われます。西の獣(鷲の翼を持つ獅子)は、イギリスの獅子アメリカの鷲、または、一般の西側同盟を代表しているかも知れません。第二は巨大なむさぼり食らう熊で、それはロシアの虚像と共産主義の衛星諸国と言ってよいでしょう。第三は四つの頭と四つの翼

を持つヒヨウです。恐らく、将来の東側同盟を象徴していると思われる。(黙示録16:12は「東の王たちの到来とタニエル11:44は「東から押し寄せる」面倒な問題について述べています)。ヒヨウは巨大な食肉獣の最も広範にいて、黒い斑点を持った黄色です。明らかにダニエルに知られていた動物で同定出来ない第四の獣は、「非常に恐ろしくずば抜けて強かった」、そして、明らかに他の三つの獣に優っています。それから、恐らく「南風」として、地中海周辺の諸国民自体を表わしているでしょう。そして、大まかに古代ローマ帝国の地域で、地中海の北と南の両方の地域を占めます。それは、「その前にいた」(文字通りには、それに立ち向かう)すべての獣とは異なつて」いた。そして、間もなく、少なくとも多少は他の獣を征服し同化するでしょう。

ヨハネが海から現れて来るのを見ているのは、明らかにこの最後の獣です。この時(患難期の真ん中)まで、この獣、—その獣は他の獣たちを十分に服従させていた。それゆえ彼の身体は彼らすべての混成物として現れます。かれは一部は獅子、一部熊、一部ヒヨウですが、また部分的に竜なのです。

その獣が世界でこのように卓越した立場になったのは、彼自身の力または彼自身の戦略によってではなかった。彼の偉大な力と王座と他の諸国民に対する卓越した統治権を彼に与えたのはサタンそのものでした。彼はどうしてこの権威を獲得するのでしょうか。人間的に言うくと、聖書に暗示されているように、恐らく、彼はイスラエルにおけるロシアの壊滅的敗北とロシアの侵入に対する西側諸国の無味乾燥な応答によって残された統率権の空位を掴む点で勝っているでしょう(6章の検討を見よ)。いずれにせよ、彼に道が本当に開かれるのはサタンとの彼の暗い盟約で、サタンは彼を世界の指導者として非常に魅力的に出現させるので、他の王たちや大統領は、患難期のちょうど前と患難期の最初の半分を通しての緊張の多い時期に、喜んで彼の権威に従います。

竜が獣に力を与えたので、獣は七つの頭と十の角を持つているようにヨハネには見えた。しかし、竜が彼の七つの頭に七つの冠を持っていた(黙示録12:3)一方、獣は七つの頭に十の冠を持っていた(黙示録13:1)。竜の印に対応する長い世紀の間、七人の偉大な王がいましたが、十の角で代表された王は、なお将来の事でもまだ王冠を戴いていなかった。獣の時代に、今や10人の王が支配していました。一方、七人の古代の王たちは彼らの悪い遺産によってだけ生きていました。

これら七つの頭が七人の歴史的王国を代表する事は、黙示録17章9-11節にも示されていて、そこに獣がまた現れます。これらの王国がどの国かは特定されていませんが、彼らは過去の歴史の七つの偉大な世界権力であるというのが合理的と思われる。彼らが七つの偉大な権力を代表している可能性もあり、彼らは、聖書に記録されていて、歴史を通して明らかにされていなかったような創造主の計画に対する特別な敵対者となります。そのしるしが竜と特別なつながりを確認するから、そして、年を経た蛇は、間断なく聖なるプログラムを妨げようとしているから、私たちは、少なくともこれらの歴史を聖書に見出せると期待できるのです。

記録にあるこれらの事を考慮して、七つの歴史上の王国として最もふさわしいのは、次のようです。…

1. スメリヤ。ニムロデの下、シヌアルの地にバベル帝国がノアの洪水後の最初の人間反逆のセンターとなりました。

2. エジプト。この古代の国家は、モーセの手の下で創造主が超自然的に救出されたイスラエルの最初の迫害者となりました。

3. アッシリヤ。プル、テグラテ・ピレセル、シャルマネセルとセナケリブの侵入軍は、イスラエルの地を荒廃させ、北王国の人々を捕囚として連れ去った。

4. バビロニア。ネブカデネザルの下ニムロデ帝国を復興し、エルサレムとその宮を滅ぼした後期バビロニアはユダの人々を捕囚として連れ去った。それゆえ、聖書の初めから終わりまで、「バビロン」は創造主の敵と同義語で、サタン自身「バビロンの王」の肩書であらかじめ示されています（イザヤ14:4-17）。

5. メド・ペルシヤ。ダニエルが予言したように（ダニエル2:39;5:28）、メド・ペルシヤ帝国は世界を制覇したバビロニアを引き継いでいて、その国では、王妃エステルの摂理による介入がなくては、ユダヤ人がハマンによって根絶されるはずであった。またその国は捕囚から彼らが祖国に帰る事を許した国であった。

6. ギリシヤ。ダニエルはまたギリシヤはペルシヤにとつて代ると預言した（ダニエル2:39;8:21;11:2,3）。そして、これはアレキサンダー大王の下で起こった。ギリシヤ語は新約聖書の言葉になった。そして、ギリシヤ哲学はそれ以来ずっとユダヤ・キリスト教世界を支配している。

7. ローマ。政治的に七つの帝国のうち最も偉大なのはローマであった。ローマはキリストの時代支配していて、紀元70年宮を破壊し、ユダヤ人を長く続く離散に追い込んだ。ローマ帝国特にネロは、初期のクリスチャンを激しく迫害した。

歴史にはイスラエルかクリスチャンかまたは両者に敵対しているほかの偉大な国や民族の群れがあった（キリストの前のシリアとツロ、キリスト来臨後のイスラム諸国、ナチドイツ、ロシア、と他の共産主義諸国）ので、上述に示唆された検証を押しつけようとはおもいません。しかしながら、聖書の強調点によれば、前述の七つは、最初の七つは、最初の七つは、最初の七つの頭と冠を付けた獣の七つの頭によって象徴された諸国、そして、第二の場合、冠の無い諸国を象徴している可能性が最も強いように思われます。この主題に関するさらなる討論は、黙示録17章3節と9-11節にある「七つの頭に関する平行記述に関連して、17章で行ないます。

黙示録13章3節 その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直ってしまった。そこで、全地は驚いて、その獣に従い、

もし前に示唆した七つの頭と七つの王国の解釈が正しいなら、それらの一つが終わりの日に明らかに生き返るでしょう。それは確かにこの生き返った頭で、その上に十の角と十の冠を載せております。なぜなら、彼らは終わりの日に関わるものです。2節の獅子の口で語っているのは恐らくこの頭です。もっとも他の頭も語っているでしょうけれど。

多くの註解者がこれを古代ローマ帝国の復興に対する言及であると考えていますが、どの頭が生き返ったかは述べられていません。実際のところ、これら大概の古代の国々は、こんにち何らかの復興を来たしているのは興味深い。エジプトはイスラム世界にとってのスプークスマンになろうとしており、イスラエルとの国交回復を試みた最初のアラブ民族となっています。ペルシヤは。現代のイランで、同じように世界の注目を浴びています。なぜならその石油資源と闘争的イスラム原理主義のゆえにです。現代のイラクは古代バビロンとアッシリヤに当たります（バビロンの廢墟はイラクの首都バグダッドの近くです）。それは恐らく最強のアラブ民族の軍隊になるでしょう。ギリシヤは今なおイタリヤと同様に大切な地中海沿岸の国です。そして、彼らの宗教文化は、色々な正統と認められている教会やローマカソリック教会を通して、それぞれ北や西の諸国全体に広

がつています。

けれども、これら生き返った国のうち全世界を「驚いて、この獣に従」わさせるほど素晴らしい国はありません。それらよりもっと大切な何かを必要とします。その何ものかとはほとんど奇跡とでもいふべきものです。北大西洋条約機構(NATO)とヨーロッパ共同市場もまた生き返ったローマ帝国の可能、K性として示唆されていますが、これらのどれも実際には目覚ましい発展を来たしてはいません。彼らは、「十の角」の前触れと言つてもよく、獣に彼らの力を与えますが(黙示録17:12, 13)、彼らは復興した頭ではなく、彼らは確かに獣でもありません。

獣はもちろん人です。けれども、彼が首長である帝国と同じなのです。それで、両者は共に同じなのです。彼はすでに「底知れぬ所から昇つてき」た(黙示録11:7)のであり、彼が昇つて来るのはサタンに分け与えられた力によつてはつきり定められており、彼は遂に創造主の3年半に及ぶ二人の証人の力を終わらせる事が出来るのです。このすべては諸国民を非常に魅了するので、彼は速やかに彼らすべての上に世界的に傑出した立場を得ます。彼が主張しているように「底知れぬ穴に」おけるサタンと共なる経験は、ある種の神秘的な超自然的現象で、それによつて死んだと思われた彼の身体(実際には、生気を留保した状態)が、彼の霊は彼が世界に対する闇の使命を果たすために必要な知識と力とをその間に悪魔から分け与えられます。

彼自身獣で、傷を負った獣の頭ではありません。しかし、(傷は死に至るものではないが、いわば死ぬほどの)致命的傷からの彼自身の回復は、古代のすべての民族の復興に与つた首長に実に驚くほど似ていて、同じように深甚な感動を与えます。彼を「昔いたが、今はいません、しかし、やがて底知れぬところから上つて来る」(黙示録17:8)者とも呼ばれ、その上「七人の王」(黙示録17:10, 11)の一人であるとも言われています。

生き返る頭は確かに王国でもあり、その王国は、獣に力を与える竜の性質と目的を最もよく具体的に表わし、諸国民を支配する彼のセンターとして・・・いわば彼の首都として役立ちます。

これはローマではあり得ないと思われれます。何故ならローマは復興を必要としないからです。ローマはカエサルの時以来世界の最大の都市の一つでした。古代ローマ帝国の没落以後、「神聖ローマ帝国」がそれを引き継ぎ、それ以降、ある意味で、ローマカトリック教会の政治と宗教制度の中心の首都なのです。

獣の真ん中の頭はバビロンと記されています。少なくとも調和という点から、バビロンは獣の最も重要な頭であるというのが最も適切(なはず)です。バビロンは、2千5百年以上前にペルシャに打ち負かされたが、少なくとも何世紀にもわたつて人の住む都市として続けました。結局それは完全に死に絶えたように思われました。けれども種々の貧弱な地域社会がそれを取り囲む地域または近くに存在し続けています。古代の栄光の廃墟は今日観光客の最高の魅力です。

バビロン再建の可能性は、イラク政府と色々な国際主義者の機構によつて、最近、真剣に検討されています。そこは理想的な所に位置し、地球の陸塊のまさに地理的中心の近くにあり、世界の首都として役立ちます。こつなる保証はありませんが、獣がこの場所を世界の首都に選ぶ可能性を信じる理由が十分にあるのです。最も進歩した工業技術を用いての急速な建設が日夜を問わず夜通し続けられる工事で、古代のバビロンを再び生き返らせるかもしれません。バビロンは世界政治の中心として貢献するだけでなく、商業、文化、宗教の中心としても貢献するでしょう。ニムロデと最初のバビロニヤ人(すなわち、進化論的人間中心的神論)の宗教哲学以来、シュメールからローマに至るすべての大帝国に広まり、このような文芸復興は、実質的には、獣のすべての頭の回復になるはずで、そして、獣自身顕著な個人的に偽りの死と甦りを経験するので、全世界は、

獣の大きな力とまた彼の偉大な文化と貿易センターの設立とあいまって首都の荘厳さに実に驚くはずです。これは単に非常に多くの聖書の教師が当然のこととして仮定している復興したローマ帝国であるばかりでなく、復興したバビロン、エジプト、アッシリア、ペルシャ、とギリシャ帝国であり、古代進化論的汎神論、ヒューマニズムをそして究極的に悪魔崇拜の力ある復興から成り立っているすべてです。

黙示録13章4節　そして、竜を拜んだ。獣に権威を与えたのが竜だからである。また彼らは獣をも拜んで、「だれがこの獣に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう。」と言った。

携拳の前の長い年月、古代の神秘主義（降神術、占星術、魔術、東洋の神秘主義とサタン崇拜）が展開し続けるでしょう。この動きはキリストが患難期の直前空中で彼らに遭うために帰ってこられる時、大勢の真のクリスチャンの携拳と共に著しく加速されます。患難期の最初の三年半の間、キリストの二人の証人（印を押されたイスラエル人の144000人と多くの他の人々の説教に加えて）の宣教は封印とラツパの大いなる裁きと兼ね合わさって、遂に、二世紀またはそれ以上にわたって知的世界を支配してきた科学的懷疑主義のすべての痕跡を取り去ってしまいます。

人々は力ある天使が空中を飛びまわるのを見その声を聞きます。彼らはキリストの証人の奇跡を見、説教を聞きます。携拳の証と共に、このような宣教は事実上多くの人を刺激し、置き去りにしていた聖書やその他のクリスチャンの文書を読むようにさせることでしよう。彼らはそのほかにも多くの証拠を持つ事になるでしょう。それらは遂にサタンと創造主の存在に対する最も多くの疑念をさえ取り除くでしょう。彼らは竜と女の間にある世紀の宇宙的闘争の真の特質の重大性を理解するに至るのです。

しかし、その時、彼らはサタンを選びます。彼らはサタンと運命を共にすることを選び、サタンは、創造主に対する長年の反逆で最後に勝利できると信じるのです。もし、サタンが死ぬほどの傷を受けた大いなる王子を甦らせる事が出来、彼に創造主のこれまで無敵であった二人の証人を滅ぼせるほどの著しい力を与えられるなら、サタンはまた彼らに永遠の命と力強いパワーを与える事も出来ると思われれば、驚くばかりにまた信じられないように思われますが、人々は、おびただしい群衆として竜を礼拝する決心をします。彼らは彼を宇宙の正当な王と認め、創造主と彼の戦いで、意識的に彼を励まし助けます。

さらに、彼らは、実際に竜の人としての方割れである獣に、竜が全世界での地上での権威を獣に委譲したことを認め、それゆえ、獣をも同じように礼拝します。何と言っても、獣が天からの二人の強力な証人を滅ぼす事が出来たのなら、地上で誰が、彼と戦って成功を収める事が出来ようか。

三年半にわたって、彼は、二人の証人とその他の回心者だけでなく、彼自身の所有地の西、北、東にある他の国々に主権を得ようと奮闘努力してきました。多分、彼もまたバビロンに彼の偉大なセンターと首都を展開させようと試みる事でしょう。彼はこれらの闘争だけでなく天からの壊滅的災害によっても妨げられました。しかし、今や遂に、彼は勝利し、全世界はすべての必要な力と知恵のため、彼自身の主人、サタンを信じ、指導と救済を求め彼の下に來ます。三年半の旱魃から救われ、災害は去り、証人は去ってしまった。そして、獣は支配を託されて、竜とその御使いは地球にやってきています。

黙示録13章5節　この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。

獣の口は、ライオンの咆哮(2)のようで、大声で咆え立てはじめます。彼に権威を与えた竜は、今また彼に世界に対し仕事に取りかかるように重大な決定を下します。創造主の聖なる靈感されたいにしえの預言者たちをまねて、彼は、真の創造主とその御子キリストに対する汚しごとで満ちた、サタンに吹き込まれた布告と預言をします。そして、彼らの差し迫った滅亡と義のあらゆる束縛と裁きの恐怖から人類を自由すると予言します。

言つて見れば、人々は彼を信じます。サタンによつて騙され盲目にされて(2コリント4:4; 黙示録12:9)、さらに薬物中毒によつて困惑され(黙示録9:21)、色々な種類の罪に無感覚になつて、彼らは彼の創造主に対する不敬な言葉を信じるでしょう。彼らは、次のような事さえ信じるのです「2:9 不法の人の到来は、サタンの働きによるのであつて、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、2:10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかつたからです。2:11 それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。

2:12 それは、真理を信じないで、悪を喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。」(1テサロニケ2:9¹²)。実際に、限定された分はギリシャ語で「彼らは偽りを信じる」と表現されています。

彼の権威は42カ月だけしか続きません。これが最後の天下分け目の戦いまでに残されたすべての時間である事をサタンは知っていました(黙示録12:12)。これは明らかに42カ月で、その間、異邦人がエルサレムとその宮を汚します(黙示録11:2)。

また、獣が彼らの後を追わせるために送つた軍隊をとりわけ滅ぼして、創造主がご自身の民を荒野で、蛇の毒牙から特別に守られる(黙示録12:6, 14)のも、この同じ時期です。

黙示録13章6節 **そこで、彼はその口を開いて、神(創造主)に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神(創造主)の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをのしつた。**

要旨は創造主をのしるだけではなく、竜に元気づけられた獣は、創造主の清さと愛と律法と恵みを中傷して、創造主がご自身の名のために立てているすべての人々に対し痛烈な非難と猥褻な言葉を投げかけます。竜は最近天から追放された。そして、獣は創造主の御住まいである天を呪います。天に創造主と共にいる人々(聖なる天使だけでなく携奉された人々も含め)は、獣の中傷を受けます。この絶え間ない中傷の集中攻撃は、今や地上で起こらなければなりません。何故ならサタンは彼が兄弟たちを常に訴えていた天にもう近づく事が出来ないからです。

ダニエルは彼の卑しむべき口について「・・・この角には、人間の目のような目があり、大きなことを語る口があつた。・・・大きなことを語る口・・・彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。」(ダニエル7:8, 20, 25)と預言していた。そして、また、ダニエルは「この王は、思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高め、大いなるものとし、神の神(創造主)に向かつてあきれ果てるようなことを語り、」(ダニエル11:36)と述べています。

この激しい悪口雑言のキャンペーンの目的の第一は、真の創造主に従う者たち又はその可能性のある地上にいるすべての人々を脅迫するためである事は確かです。竜は彼の階位を天から地へと落とされたのです。

人の王国

ニムロデ以来、世界を支配しようとする熱心に望んだ多くの力強い野望を抱いた人々が起こされてきました。人に対して残忍で邪悪とでもいうべき、このような独裁者たちは、なんとかして多くの追従者を得、多くの国々を征服してきました。聖書に述べられているこれらの王たちの他にジンギスカン、ナポレオン、ヒットラー、スターリンなどを考えます。しかし、次々に彼らは失敗した。創造主はニムロデに世界政府を樹立することを許さなかったし、また誰にも許さなかった。強大なローマ帝国でさえそれを達成できなかった。ローマは、バルテヤ帝国（ベルシャ）は言うまでもなく、アフリカ、東洋や北欧の大民族をさえ服従させる事はできなかったのです。

西洋世界の理想主義者たちも、世界政府を夢見ています。テニソンは詩で「人の議会」、ウッドロウ・ウィルソンと彼の国際連盟、今日の国際連合の組織すべては試みられ、失敗しました。いろいろの陰謀集団（共産主義者、イルミナティなど）は、それを成し遂げる希望を持っていました。そして、国際的な銀行業・企業の今日の設立は、このようなゴールに執着しているように思われます。しかし、創造主は決してそれを許されません。

すなわち、今の時代の終わりに初めて、種々様々な世界政府があるが、最後にもう一度、人間中心で無駄ではあるが、ただ最も重要な行使があるのです。

黙示録 13 章 7 節 彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、

国語、国民を支配する権威を与えられた。

獣が非常に欲しがっている世界帝国を確立する前に、彼の王国で彼に抵抗する人々とまだ降伏していない他の国々をも従わせなくてはなりません。彼に対する最大の抵抗者は、「聖徒たち」すなわち真の創造主とキリストを信じた大勢の信徒たちで、彼らは、患難期の前半に回心した人々です。これらの人々は武装し抵抗を企てるなどの兆候はみられません。しかし彼らの道徳性は、地球を一掃した災害の際に、害を受けることがなかったと思われる信仰と結びついて、彼らを獣の憎しみと怒りの特別の対象にします。多くの信者たちは患難期前半に殉教の死を遂げ、さらに多くの者が獣の彼らに対する悪意ある組織的活動の結果殉教の死を遂げるのです。

ダニエルは聖徒たちに対する闘争について語っています。「私が見ていると、その角は、聖徒たちに戦いをいどんで、彼らに打ち勝った。」（ダニエル 7:21）。特に、二人の証人の死とそれに続く昇天の後（黙示録 11:7-12）、獣は組織的に真の創造主を礼拝する人々（そのことでは、彼自身と竜以外の神々を拝む者も）すべてを滅ぼそうとします。そして、死を免れた人々にとって唯一の道は、逃げたり隠れたりして死を免れなければなりません。私たちは、この時期にイスラエルの残りの民を象徴している「女」が、創造主によって準備された荒野の隠れ家で、既に超自然的に保護されているのを見ます（黙示録 12:6-13:16）。確かに、他の多くの者が世界中の他のところに隠れて生き延びるでしょう。しかし、多数の人々が彼らの信仰のゆえに殉教の死を遂げます（黙示録 6:9-11; 7:9-17; 12:10-11 を見よ）。

獣は世界の他の国々とその軍隊をも征服しなくてはなりません。そして、この征服は患難期の前半の間

彼の注意の多くを占めるでしょう。患難期の7年が始まる前に於いてさえ、ある程度、彼は地中海周辺諸国の間で指導者としての地位を得るに違いありません。この時期は、既に検討したように（6章と11章を見よ）、彼がイスラエルとの7年の契約を結ぶ（ダニエル9:27）時期に相当します。勿論、クリスチャンの携拳（1テサロニテ4:16, 17）が起る前にこの突出した地位にのぼることも考えられますが、携拳と7年の契約調印の間に時間が経過する事もあり得るのでしよう。携拳は聖書で日が決められておらず常に差し迫っているからです。（「目を覚ましていなさい」と主は命じておられます。）

諸国の上に主権を得る獣の戦いの幾つかの輪郭がダニエル7:3-8, 19-25とダニエル11:4-5に描かれています。ダニエル7章の記事は、この闘争で最頂点に達し、「聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。」（ダニエル7:25）と記しています。ダニエル11章の記事は「その時、・・・大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。」（ダニエル12:1）との声明で締めくくつています。その時、「この不思議な事は、いつになつて終わるのですか。」との質問に答えて、天使が「それは、一時とふた時と半時である」と返事をしています。二つの記事は共に私たちが患難期の終わりの半分にまで連れて行きます。そして、この「来るべき君主」獣が患難期の真ん中までに、またはその少し後までに彼が熱望していた世界の至高の地位を得ることを示しています。

こうして、力（この用語は事実上「権力」を意味する）が、全世界の国とその国内にいることばの異なるすべての群れと、同じ言葉話す群れの氏族すべてを支配する力が彼に与えられた。これは確かに不自然な統治になります。他の多くの野心的指導者は渋々いやいやながら従います。そして、これらの大勝利を完全に統合整理するためにふさわしい時間もないし十分な憲兵隊もありません。それにもかかわらず、彼は大昔

のニムロデがバベルで試みて失敗に終わつて以来、すべての人を名目上支配出来た最初の人になります。

黙示録13章8節 地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拜むようになる。

私たちは4節で彼らが、竜と獣の両方を拜むようになるかと告げられています。ここで私たちは皆ここで用いられた「彼ら」と言うことばの中に取り入れられていると告げられています。すべての国のどこに住んでいる人でもすべての男女が、この実に卓越しているが非常に邪悪な人を拜むようになります。たとえ彼らが最早創造主の存在を疑いえないとしても、彼らは創造主としての真の絶対者拒否するのです。しかし、彼は信じます。この人（そして彼の主人サタン）は創造主より偉大でさらに力があります。それゆえ、この人は創造主より礼拝されるべきで、すなわち、人々の意思是獣に服従させられるべきなのです。古代の異教徒がしたように、また近代の共産主義者がするように、彼らは、「彼らが創造主の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拜み、これに仕えたからです。」（ロマ1:25）。

ここでヒューマニズムは気が狂ってしまったのです。人は人類の自治を求めており、したがって、人自体は、宇宙進化によって到達した最高地点であり、こうして人自体が絶対者であると結論しています。しかし、その後人類の目に見える代表を持つ必要に迫られ、その人に対して絶対者の代表を模った礼拝が為されます。このように、世界の最も偉大な人を礼拝するに当たって、彼は潜在意識で自分自身を礼拝し、こうして「彼ら」は喜んで邪悪な怪物に忠誠を誓うのです。そして、このような宇宙全体で高い地位を得るため、

彼自身のような人の手腕を自分のことのように感じ満足します。また、勿論ヒューマニストである彼は自分の邪悪な心と行為で行う邪悪さによる良心の苦痛から事実上開放されているのを見出す事が出来るのです。

即ち、主がご自身のために保持しておられる人々を除いて、すべての人は獣を拜むようになります。ここで用いられている用語は重要です。小羊のいのちの書に名の書かれている人すべてがこの時点までに、キリストに対する信仰を公に告白しているわけではありません。しかし、彼らは間もなくそうするでしょう（そうでなくても、少なくともそうなります）。なぜなら、彼らは獣に服従している人々の中にはいなかったのです（Ⅲ章に在る黙示録3・5のところを取り扱っている「いのちの書」の重要性に関する検討を見よ）。これらの多くは荒野で創造主によって保護されていた敬虔なイスラエル人です。そして、この時、彼らは彼らのメシヤとして救い主として主イエス・キリストを知りかつ認めるようになるのです。とにかく、これらの最後の日においてさえ、たとい命を失うことになろうとも獣礼拝に尻込みする人々が沢山いたのです。

小羊は、少なくとも原則と創造主の先見で、世界の礎（もと）が築かれる前から殺されることになっていたので、いつか生まれてくる一人一人の名前を、完全な公平さをもっていのちの書に書く事が出来たのです。小羊が払う贖いの代価は、各自の罪を覆って余りある程十分な価値があった。それゆえ、彼らの名前は世界のはじまる前に小羊のいのちの書に書かれていたのです。しかしながら、人々は生きている時、信仰によってキリストを個人的に受け入れることを通して、いわば、いのちに入る事ができるのに受け入れないで死んだ時、次から次へといのちの書から名が消されてしまうのです。遙かに大多数の人々が、有史以来キリストを拒否するか無視して罪を解決しなのまま死にました。人々が獣を礼拝するか、そうでなければ死ななければならぬ時、これは恐ろしい患難期で、この時はより一層恐ろしい時期となります。

黙示録13章9節 耳のある者は聞きなさい。

これはヨハネが初期に七つの教会の御使いに伝えた嘆願のメッセージと同じです。もし、今の教会に属するクリスチャンたちにこのメッセージに注意するのが重要であるとするなら、それは後の時代の人々にとっではどんなにか差し迫って警鐘しなければならぬことでしょう。この場合、メッセージは教会に当てられたものではなかった。何故なら患難期のこの恐るべき時期には組織的教会はないからです。それにもかかわらず、忠告はかつてない程必要です。人がもし獣を礼拝するなら、いのちの書に書きとどめられる余地はなくなり、確かに永遠の地獄に入ります。もし彼らが獣を拜まないなら彼らは迫害を受け殺されます。それは彼らを選ばなくてはならない厳しい選択で、彼らはその意味を危機理解する必要があります。もし誰かが何らかの理由でこの決断を延期しているなら、獣はその決断をせかさせます。獣の印を拒否し、獣を拜むのを拒絶して死ぬか、さもなければ、獣の印を受け彼を拜むのです。そして獣と竜がキリストに打ち勝ち地獄が空になるのを望みます。

他の殉教者たちは、恐れることなく勝手に同じような選択をしました。そして、彼らの血の証は、終わりの日に彼らが獣と獣の手先に立ち向かう多くの殉教者たちに対する証人となります。

黙示録13章10節 とりこになるべき者は、とりこにされて行く。剣で殺す者は、自分も剣で殺されなければならぬ。ここに聖徒の忍耐と信仰がある。

主は、恵み深くここに迫害にあつている聖徒たちを勇気づけることばをさしはさんでおられます。彼らを悩ます道具となった人々は、まもなく同じようになります。創造主はずっと昔「目には目を命には命を」という戒めと原則を列挙され、それは裁きの日に実施されます。獣に対する法の実施者である人々に関する限り、恵みの日は完全に過ぎ去りました。患難期の苦しみにあつている信徒たちを追跡し投獄する警察の代理人は間もなく限りなく悪い牢に投げ込まれます。獣礼拝を拒否して捉えられ刑を執行された人々は、恐らく、来るべき征服者の口から出ている恐ろしい剣によつて（黙示録19:15）殺されます。

このような厳しい迫害の期間、聖徒たちを支援助けるといふ約束と確信があります。この約束に立ち聖徒たちの信仰は保たれ、患難期に彼らは忍耐し続けます。この節が語っているその忍耐は、辛抱強い忍耐です。「自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもともせず十字架を忍」（ヘブル12:2） ばれた、彼らの主のように、彼らは「もつとすぐれた、いつまでも残る財産」を天に「持つて知っていることを知っています。そして主の約束に対する彼らの確信は、「大きな報いをもたらす」ことを知っているのです。

なお他の意味で、強調されている「ここ」は、これら終わりの日の恐るべきストレスをさし、それまでの時代の信者たちが忍耐したどんなストレスをより大きく、かつて経験した忍耐と信仰の内最も素晴らしいテストとなります。ここに忍耐と信仰の定義があります。

偽りの預言者

竜と獣の印は、今や他の局面に、悪魔の三位一体の第三位格である悪悪な人物に代わります。キリストの

栄光を現わす聖霊（ヨハネ16:14）の邪悪で下手な模倣で、この第三の人物は、人に獣を拜むように求めます。獣は竜から権威を受けていました。彼はここでこの名では呼ばれていないけれども（この時点で、彼は単に地から上がった獣と呼ばれています）、彼は黙示録の残りの部分で三回「偽りの預言者」と呼ばれており、獣と竜とに直接関係があるのです（黙示録16:13; 19:20; 20:10）。

黙示録13章11節 また、私は見た。もう一匹の獣が地から上つて来た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。

ヨハネは最初の獣のように海からの代わりに地から昇つて来る他（すなわち、「同じタイプの他の」）の獣（ギリシャ語テリオン、「危険な獣」）を見ます。最初の獣は人なので、第二の獣も人ですが、彼らの背景は異なります。以前に記したように、「海」は恐らく地中海を示唆しており、最初の獣は地中海を取り巻く王国の一つから来るこの言外の意味があります。事実、ダニエル9章27節は、彼が古代ローマ帝国の人々に由来すると示唆しており、恐らく、ローマ人の直接の子孫でしょう。その証拠に、第二の獣は、地中海の諸民族の外にある大陸のどこからやつて来るに違いないが、私たちは、彼の起源についての手掛かりを見出せません。この第二の獣が誰かについて多くの憶測が為されています。後で、彼は偽りの預言者と呼ばれているのですから、彼は、見たところ、第一に奇跡を行う宗教の指導者として世の注意を引きまします。そして、人類に超自然的に靈感されたメッセ・ジを伝えると公言します。彼の「予言」はもちろん創造主からのものではなくてサタンからのものです。けれども最初（恐らく患難期の前）は、それは多分、創造主からのメッセ・ジを受けた人

として知られるようになるかも知れません。彼は、真の預言者であると自称しているが、実際には、偽りの預言者です。イエスは、大患難に現れるにせよ、キリストとにせよ、預言者について警告し、これら二人（反キリストとにせよ、預言者）は、二人一組になり人を騙すペアの原型なのです。

実際に「反キリスト」という用語は、ヨハネの書簡にだけあって、創造主に仕えていると自称して人をだます誰にでも当てはめる事が出来、同時に、彼らは、超自然的に受肉した創造主としてのまた人としての性質を持ち合わせたキリストを否定しているのです。しかしながら、「反キリスト」の概念は、古代のまた近代のキリスト教の文献にしばしば出てきます。そして、いつもは、これら終わりの時代のキリストの教えに反する世界の偉大な独裁者に対する言及です。第二の獣をある註解者（スコフィールドのように彼の参照聖書のように）は反キリストと解釈しています。しかし、これは勝手な解釈と思われず。いずれにせよ、黙示録のここではヨハネは彼らを獣又は偽りの預言者と呼んでいます。そして、新約聖書の節で唯一「反キリスト」という用語が用いられているところの著者として、ヨハネは、これらの二人のいずれに対しても黙示録で「反キリスト」なる用語を当てはめていません。事実、彼は既に肉体を持ってこられたイエス・キリストを否定する者は、だれでも「反キリスト」であると言っています（定冠詞がヨハネの第二の手紙を参照するとこのように用いられている）。

この第二の獣は、明らかにある種の宗教の代弁者で、終わりの時代に昇り詰める世界の宗教体系の指導者で、黙示録17章の大淫婦としての究極的性格を持つてやって来ます。

近代のエキュメニカル運動は、20世紀の前半には背教的プロテスタント教会（または、少なくとも宗教団体の会員になって）で活動を始め、それから、本質的に、20世紀の後半でカトリック教会やロシア正教などと結びつき、最後には、特に、キリストにある全ての真の教会から離れ去った後に、世界にある他のすべての宗教と連合します。この第二の獣、もしくは偽りの預言者は、多分この普遍的宗教の大司教（または、法王、またはイスラム教シーア派の高僧に対する尊称であるアヤトラ、またはヒンズー教の導師、恐らく単に「預言者」として出現するでしょう。彼はもともとキリストの思いやりのある性質をまねるでしょう。しかし、彼の「霊感された」言葉は、サタン・年を経た竜のことでしょう。最初、かれらの言葉は甘い騙し言葉でしょうが、間もなく、致命的な凶暴な竜のこぼになるのです。

黙示録13章12節 この獣は、最初の獣が持っているすべての権威をその獣の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拜ませた。

サタンに能力を与えられた二人は、どういうわけか患難期が実際に始まる前のある時期に恐らく同盟を結ぶようになります。宗教と国の連携は専制政治と抑圧の長い悲しい記録を持っているが、これら二人の獣の宗教と政治の連携は、ついに世界史上最悪の類を見ない迫害の時となります。

最初の獣の政治力が全盛に達するまでに、世界宗教の諸派統合的同盟も第二の獣の管理下に一点に絞られるようになります。各々の指導者は、預言者の宗教的権威を強要する王と王が神として礼拝され従われるべきとする迷信を世界集団に信じ込ませる預言者が、お互いに他方の指導者を助け支持します。

既に確立した奇跡を行う預言者としての世界的名声を持っていて、獣の注目すべき疑似復活を果たした獣が世界中の教会や寺院に属する人々が彼を聖なる者・礼拝に値する者として認めるように公表し、理想化する

るのを見ます。両者はすぐ空前のチームになります。そして、全世界のどこにいる人に対しても普遍的支配を確立するパートナーとして働きます。

黙示録13章13節 また、人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしを行なった。

偽預言者はある種の奇跡をサタンの力によって遂行できるのです。そしてこの事はさらに彼の名声と権威を強めます。これらの不思議の中に、天から火を地に降らせる能力も含まれます。サタンにつく天使たちが持つ気象現象を理解し制御する特殊な能力は、恐らく偽預言者にあれやこれやの奇跡を実行出来るように分け与えられるでしょう。天から火をもたらす能力はキリストの二人の証人が、三年半にわたり不信の世を脅かすために用いた一つの事実なので(黙示録11:5)、彼らは確かにそれを利用することでしょう。獣が彼らに打ち勝ち彼らを殺したとしても、彼らの魁りと携拳は世界中に知れ渡り、人々は、なお彼らの力を恐れていました。獣と偽預言者が証人たちと同じような力を持った事をどこにいる人も恐らくテレヴィジョンで見るとは重要なことであつた。

黙示録13章14節 また、あの獣の前で行なうことを許されたしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。

『地上に住む人々』ということばはこの節で二回、黙示録全体で13回出てきます。これら地に住む人々は

サタンの欺きに今や容易に従い、特に奇跡を行う預言者の能力によって感銘を受けます。

有史以来人々は、常に超自然的な事象に完全に畏敬の念を起こさせられてきました。より疑い深い人が創造主の奇跡に遭遇した上で、悪魔の奇跡を見る時ますます騙されやすくなるのがしばしば見られる事実です。サタンとその天使たちは創造の奇跡だけは出来ません。何故なら、創造主だけが創造できるからです。彼らは、自然過程を時々巧みに操る事が出来また操り、異常なそして見かけ上説明できない現象を生じさせます。こういうわけで、真の創造の奇跡以外の奇跡は、必ずしも創造主起源である必要はなく、したがって、奇跡を生じさせた人々の目的と聖書のことばに対する忠実さ(イザヤ8:20)で常にテストされなくてはなりません。

特に、終わりの時代にはこの様な悪霊による奇跡が沢山あるでしょう。主イエス・キリストは警告していました。「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしや不思議なことをして見せます。」(マタイ24:24)と。パウロは、「不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、」(IIテサロニケ2:9)と述べて恐らくこの同じ偽預言者について語っています。彼の奇跡は、偽りの奇跡です。その奇跡をする彼らの目的は、人々が「偽りを信じるように」(IIテサロニケ2:11)させることです。そしてサタンの像を持つ「罪の人」が「神の宮(エルサレムにある神殿)の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します」(IIテサロニケ2:3,4)。

人々は、科学時代に於いてさえ、いつも偶像礼拝に陥る傾向があります。そして、彼らは信頼を置く事の出来る人または場所を常に求めています。知識人が真の創造主はいないと決断していても、進化論が彼らの心を偶像礼拝に向かわせるのです。その時、人を進化の最先端とみなし、彼らは偉大な人を絶対者とし偶像にします。そして、ダーヴィンとかマルクス、ヒットラーとかスターリン、天皇とか毛沢東、アインシュタイン

ンとかシユワイツァーに膝をかがめ礼拝します。彼らは彼らの名譽のために大きな像を建立し、彼らに敬意を払って、彼らの墓とか生誕地を見るために巡礼の旅に出かけます。

この進化的ヒューマニズムに立つ偶像崇拜の体系は、死を征服し、創造主の素晴らしい証人に打ち勝ち、また世界を奪取した人、全ての人の中で最も偉大な人として獣に対する世界的礼拝でその頂点に達し、これ以上あり得ない最高潮に至るのです。彼は完全な人で、全人類が数千年捜し求めていた彼らの偉大な指導者であり、普遍的平和、繁栄と創造主に対する恐れから人々を自由にする王です。

今や、未来の希望が実現できそうに思われます。そして、全世界は、獣と竜を礼拝しています(4節)。この礼拝を儀礼化し組織化するのには当然の事に思われます。預言者は、皇帝の小さな像を鑄造し人々に購入させ、彼の権威と慈善行為を思い出せるように彼らの家庭に安置し用いるよう人々に指示します。

しかし、これらすべて家にある神々は、大きい獣の像に模して造った単なる複製に過ぎません。ダニエル書2章31節や3章1節にあるネブカデネザル王の巨大な像のような一つの像が、最も効果的場所に立てられることでしょう。そして、全地のどこにいる人にとつてもこの像は人が中心のすべての礼拝に取って考える最も適した対象であり、あらゆる面で完璧な人を象徴するのです。

ヒューマニズムの偶像崇拜のこの全世界的体系の確立には、少なくとも二つの目的があります。すなわち、①罪人のはかりしれない自我意識の満足(傲慢の罪は悪魔の罪で、すべての罪の根源の罪、そして罪人は確かに傲慢な人です。(2)王としてと同時に神として人々に彼を受け入れさせる事によって彼の支配を固める創造主に対する汚しごとの最たるものは、遙か昔ダニエルが預言「彼(すなわち、来るべき王子)は一週の間、多くの者と堅い契約を結び(すなわちユダヤ人にユダヤ人が彼らの宮殿を再建し古代の礼拝の儀式を許可す

るといふ七年の契約をする)、半週の間(すなわち、七年の契約の中間の時で)、いけにえとささげ物とをやめさせる(契約を破棄し犠牲と礼拝の儀式を止めさせる)。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」(ダニエル書9:27)「参照…なお口語訳は次のようです。「彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう。また荒す者が憎むべき者の翼に乗って来るでしょう。こうしてついにその定まった終りが、その荒す者の上に注がれるのです。」

ここで用いられている「一面に拡がっている、覆っている」は、ケルビムが神殿の至聖所にある聖なる契約の箱を覆っているように、もともとヘブル語では通常ケルビムの覆っている翼で用いられている「複数の翼」をさす言葉です。しかし今や、この聖なる所で、ケルビムの翼の代わりに、ケルビムの翼のように、広く拡げられた腕をもつ罪人の巨大な像が建てられるでしょう。用語「忌むべきもの」は、人が犯し得る最悪の犯罪と汚染を意味し、聖書ではしばしば偶像を造り拜む事に当てられています。このように予言は、神殿とその至聖所を荒廃(同じ言葉は、驚愕に対して用いられています)させるといふ言語道断な不敬な事を予見しています。そして神殿の聖なる備品と真の礼拝者を取り除き、すべての人が拜まなくてはならない獣の不格好な巨大な像をそこに取り付けるのです。

主イエス・キリストはまたこのやがて起る事に言及しています。「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように)そのときは、ユダヤにいたる人々は山へ逃げなさい。…そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。(マタイ24:15-21)。

これはまた、パウロがテサロニケ人への手紙に書いている出来事に違いありません。「だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神(創造主)と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、創造主の宮の中に座を設け、自分こそ絶対者・神であると宣言します。」(IIテサロニケ2:3, 4) 第一の獣の軍隊と警察の力は、このように第二の獣の宗教的巧妙さと不思議な働きを可能にする事によって開発されます。像が聖なる所に立てられるとき、神殿には間もなく礼拝者はいなくなり、イスラエル人は荒野に逃げ(黙示録1:12; 12:6)るが、地球に住む多くの人々は速やかに罪人であり悪魔自身である偉大な人を従順に礼拝するに至るのです。

黙示録13章15節　それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。

偽りの預言者は恐らく彼の魔術の全ての離れ業のうち最も素晴らしいマジックを行うでしょう。像が刻まれ神殿に立てられるや否や、像は話し始めます。この像は、単にコンピュータの操作で声を出す単なる人造人間以上のものです。それは、あらゆる自動装置と応用運動学をもってすれば、今日それほど驚くべきことではないはずです。何百万人もの人々が、デズニールランドでアブラハム・リンカーンの像が動き話すのを観察していますが、彼らは、ほとんどリンカーンの像を拝むために頭を下げません。

罪の人の像は、分かりやすく話します。そして、彼の言葉は、あらかじめ予定されてはいないのです。彼は命令を発します。その中には彼を拝まないすべての人を殺すようにとの命令もあります。このとてつもない出来事を観察している人々は、エルサレムに住む人々であれ、世界の他の地域のTVで見ている人々であれ、像が実際に自分の意志で話していると悟らせられます。

勿論、像は実際に命(いのち)を持っていません(創造主だけが命(いのち)を創造できます)。その言葉は、ギリシャ語で Pneum で、「霊」とか「風」を意味します。彼の主人であるサタンは、偽預言者をして像に霊を与えることを可能にしますが、その霊はサタンの汚れた霊の一つです。恐らくサタンの階級で高位の悪霊です。これは悪霊付きの著しい例で、男や女のからだではなく悪霊が像の身体に執りついているのです。そして、丁度、悪霊が人に執りついて自分の自身のメッセージを伝えるため人の声帯を用いる事が出来るように、獣の像に住みついた霊が、「複雑な「audio-animatorics」内蔵されたロボットが人の音声再生機構を備え電子工学で制御する技法を持つ繊細な装置を用いることでしょう。その装置を用いてサタンのメッセージを伝えるためメッセージも用意されるでしょう。恐らく、これらは世界中の家庭にある個々の複製された像に備え付けられたレシーバー(受信機)に伝えられ、だれしも獣が話しているのを聞く事が出来るのです。

これはサタンが残りの者を観察するために用いる正確な手段かどうか、とにかくこの預言はそっくりそのまま起こりそうです。像を通して獣を、そして獣を通して童を礼拝しないのが死刑に当たる犯罪と見做されるとの勅令が何らかの方法で全世界に伝えられるでしょう。各家庭にモニターを取り付ける事は実行可能ではありません。そして、情報をコンピュータの集中回路網に集め、そしてこのような礼拝が実際に行われたかどうかと同時に、獣の広大な知的回路網が要求する他のどのような情報もコンピュータに記録されるでしょう。

黙示録13章16節　また、小さい者にも、大きい者にも、富んでいる者にも、貧しい者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々にその右の手かその額かに、刻印を受けさせた。

彼の広大な支配下にある人々の活動をよりよくコントロールするために、各個人は登録し、世界帝国の忠実な市民であると認められる印を受けるように要求されます。アジアやアフリカの広範な土地でこの登録を實行するにはは困難が伴うと誰でも想像するでしょうが、世界的に絶対なものと意図され実行されます。それには、どんなに富んでいてもまたどんなに身分が高くても例外扱いはなく、登録センターが各地域社会に立てられ、人々は期日を切つて登録し、印を受けたことを報告するように指示されるのは確かです。

印の特性は記されてはいませんが、基本的原理は色々な民族で多年かにわたつてうまく出来上がっています。社会保障証、徴兵登録証、登録図案を手の甲に印刷すること、そしてほかのいろいろな工夫はこの統一的商標のすべての先駆者です。「刻印」という言葉自体はギリシャ語チャラグマです。チャラグマは獣の刻印(8回)に関して、黙示録だけで用いられており、さらにもう一度使徒の働き17章29節に「人間の技巧や空想で金や銀や石などに彫り付けた」偶像に関して用いられています。刻印はどこか疥癬や入れ墨に似ていて、一度刻まれると取り除くことはできません。そして、獣と竜の追従者として永遠に定められるのです。人はこの印を創造主のしもべたちの額に押された保護の「印」(黙示録7:3)と対比するかも知れません。あの印は明らかに父なる創造主の名でした(黙示録14:1)。そして獣は彼らの額か右手に獣の名を焼き付ける事によつて、これをまねようとしたと思われれます。

黙示録13章17節　また、その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持っている者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。

あえて誰の眼にも明らかにするため(強いて明らかにする点に関する限り)表面に見えるところに刻印を押す方が財布に入れるカードやその他の細工よりはるかに優れています。焼印を押される事は非常に品位を落とすことになるので、それに対する敵意と反逆は広く行き渡り、その履行を妨げると考えられます。確かに多くの不平を言う者がおり、多くの者が登録センターに報告するのを拒否するでしょう。この事は特に創造主に信頼している人々に於いて真実です。彼らはこの行為が意味する霊的問題を理解していたので、獣に属するといふこのような永遠の肩書を確かに拒否します。

しかし、この刻印なしに何とか生き延びる事は実に困難です。一度この機械がが作動し始めると、誰もどんな種類の雇用にありつく事も、雇われ続けることもできないし、どんな独立した商売も為し得なくなりません。たとえば、彼がどこか離れたところにお金とか価値ある物を蓄えていても、彼は金を使うことも財産を売ることもできません。どのような商売も、もし、商売のあらゆる会合で彼の額か右手にある獣の印を見せなければ、合法にはなりません。もしある会(Party)が獣の印を持っていなければ、他の会の人々が至る所にある警察に彼を報告するでしょう。そしてそれは彼に対する死の宣告となります。何故なら、生きていますすべての人が獣を拜まなくてはならないと獣の像が命じているからです。そして、礼拝は確かに服従することも組み込まれています。獣を礼拝しない者は人民の敵として死ななければなりません。

多くの人々が確かに土地の物を食べて、または、荒野に又は他の方法で秘密の最小自治区を樹立して生き続けたでしょうか。それには非常な困難と危険が伴います。彼らの農作物と牧畜を持つ田園地帯は一時しのぎの避難所に過ぎませんが、全世界は、丁度3年半の乾期（黙示録11:3、6）を、そして、第3の封印の裁き（黙示録6:5、6）を連想する飢饉を耐え抜いたばかりです。それは恐らく主がマタイ25章31〜46節にいわゆる「諸国の民」（または「異邦人」）の裁きと言及しているこれらの人の心に心的外傷を惹き起こす時です。その時、キリストは、キリストにある人々に助けの手を差し伸べた人々を称賛しますが、手を差し伸べなかつた人々に永遠の刑罰を割り当ててののです。

明らかに商標は三つのかたちのどれか一つになることでしょう。皇帝が彼に従う人々を一言ってみれば、恐らく、軍隊、政府と市民に分類しようとした基準に基づくでしょう。その各々には異なる権利と義務が当てられます。第一のグループは焼印、即ち獣に相応しいある独特のデザイン（または、ロゴ）を受けます。これは恐らく全住民の大部分に当てられます。第二のグループは、獣自身の名が刻印され、恐らく、獣の目的と行為に密接に関係する人々です。第三のグループは、番号で刻印を押される人々です。その数は彼の性質と彼の名前にあう特有の印です。個人がこれら三つの商標のどれか一つを示せないなら、彼をサタンに委ねる者として永久に刻印を押され、彼は苦難と死に渡されます。

六百六十六

黙示録13章18節　ここに知恵がある。思慮ある者はその獣の数字を数えなさい。その数字は人間をさせているからである。その数字は六百六十六である。

黙示録のこの驚くべき章の締めくくりの句は、最も面白い。それはヨハネが難題を提供しているかのようで、挑戦すると獣の正体を人々が決定する助けとなります。しかしながら、一端患難期が始まると、彼の正体に関して疑問はなくなります。何故なら、イスラエルと7年の契約を結ぶのは彼だからです。それゆえ、ヨハネは明らかに、アジアの七つの教会での最初の読者たちのため、そして、それゆえ、教会が患難期の前に携挙される前のその他すべての信者のために、この解決の手がかりを与えようとしていたのです。

しかし、彼は何故このことをするのでしょう。もし教会が獣が力を持つてくる前に移されるなら、好奇心や雑談の項目として以外に、それが彼らにどんな違いをもたらすのでしょうか。もし彼が獣とはだれかを知るときと感ずるなら、獣の名をはっきり与えればよいではないですか。ヨシユアとクロスは預言的に彼らが生まれるずっと前に名が付けられていた。（一列王記13:2；二列王記23:16；イザヤ44:28；35:4；エズラ1:1〜4）。

最初の質問に対する答えは、獣は次第に力を帯び、患難が実際に始まるずっと前に世界でよく知られるようになるでしょう。彼は確かに非常に印象的人格の持ち主と大きな能力と人間的魅力を持つ指導者でしょう。彼の人を納得させる新しい形の進化論的ヒューマニズムは、特に、学校で教えられている旧式の進化論に浸っている若い世代にとって、素晴らしく魅力的になるでしょう。そして、彼は政治的指導者になるずっと前に国際的英雄になるでしょう。ダニエルが決定的罪人の型であるとした古代シリヤの悪い君主・アンティオコスエピファネスのように彼は、卑しむべき者で、彼は「不意にきて、巧言をもって国を獲るでしょう」（ダニエ

ル11:21)。偽りの預言者が、「出来れば、選民をさえ騙す様に」、彼と同様の人々は、本当のクリスチャンに対してさえ大きく影響します。反キリストの実際の王国が建て上げられるずっと前に、反キリストの教義が真のクリスチャンの中にさえ死に至る損失をもたらします。あらかじめの注意はあらかじめ用意させるためです。もし、彼の本当の性質が認められ、彼が力を持って実際に来る前にあらわになれば、クリスチャンに対する多くの害を防ぐ事が出来ます。それゆえ、世が獣を認める前にクリスチャンが認めるための「知恵がここに」あるのです。

なぜヨハネが彼の名を率直に私たちに知らせないか、その理由は、恐らく、キリストの言葉を真に愛しそれらを調べ出す人々にだけ創造主がこの秘密を知らせることにあるのでしょう。箴言にこの原理が宣言されています。「わが子よ。もしあなたが、私のことばを受け入れ、私の命令をあなたのうちにたくわえ、あなたの耳を知恵に傾け、あなたの心を英知に向けるなら、もしあなたが悟りを呼び求め、英知を求めて声をあげ、銀のように、これを捜し、隠された宝のように、これを探り出すなら、そのとき、あなたは、主を恐れることを悟り、神の知識を見いだそう。主が知恵を与え、御口を通して知識と英知を与えられるからだ」(箴言2:1-6)ダニエル書の締めくくりの言葉は、「・・・悪者どもは悪を行ない、ひとりも悟る者がいない。しかし、思慮深い人々は悟る。」(ダニエル12:10)。主イエス・キリストは同じ原理を言い表しています。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」との弟子たちの質問に答えて、「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。」と主は答えられました。

明らかに、主は子たちが罪の人が来るそれが誰かを知ることが望んでおられますが、キリストの言葉を信じて疑わない信仰と快(こころ)よく信じて歩み、従順に御言葉を学ぶ態度に応えてだけ知らされるのです。こうして、彼の正体を学ぶ人々だけが、そして彼らは、創造主と同船している人が備える隠された知識を見出だすのです。その人は、このような知識を適切に用いた目の理解力を持つのです。「ここに知恵があります!」ここに「獣の数を数えなさい」との手掛かりがあります。然し、それは何でしょうか。前の節で、それは「人の数字」であると私たちに告げています。」即ち、獣は王国ではなく人です。そしてその人は名を持っており、その名は数字です。私たちはその人の名前の数を数えるべきです。

しかし、どうしたら人の名の数を数えられるのでしょうか。英語では、このような知識は馬鹿げていますが、ギリシヤ語やヘブル語ではそうではありません。英語に、異なる数字に対し決まった文字記号(アラビア数字)があります。しかしながら、ヘブル語やギリシヤ語(それぞれ旧約聖書と新約聖書の元来の言語)で、アルファベットの文字を用いたそれぞれの記号は、また数字のためにも用いられた。同じ事がラテン語でも部分的に本当です。こうして、Vは5、Xは10を、Lは50、などを意味します。

黙示録はギリシヤ語で書かれたので、黙示録で指示しているのは特にギリシヤ語と考えられます。ギリシヤ語の各々の文字は、それに対応する数字がある、したがって、各々のことばは同じようにことばを構成する各文字の値の合計に等しい数字の値になる。こうして、ギリシヤ語の α (アルファ)は数字の1に用いられる。 β (ベータ)は2に用いられ、 ι (イオタ)は10を意味し、 ρ (ロー)は100を意味する、などなど。

名前の数を数える事は、明らかに名前にある文字すべてに付けられた数をただ合計する事を意味します。もし人の名がギリシヤ語なら、これは分かり易い操作です。もし彼の名がある他の国語なら、その時は、彼

の名は容易にギリシヤ語に字訳されます。私たちは、この来るべき君は古代ローマの子孫かもしれないことに注目した。ダニエル9章27節の預言は、ローマまでさかのぼる法的文化的流れを持つどの国の人（それは西洋のどの国であつてもよい）にでも当てはめうると理解してよいのかもしれない。しかし、ラテン語（古代ローマのことば）は今日においては死語となっています。そして、ラテン語の文字の幾つかが、とにかく数字のために用いられているのです。

本質的に、ギリシヤ語のアルファベットの文字と英語のアルファベットの文字の間（同様に、ギリシヤ語とフランス語、ギリシヤ語とイタリア語の間など）には一対一の対応があります。斉唱のことばによる名前ならどの一つの名でもそれに対応する字訳が可能です。例えば、Robert はギリシヤ語で次のようになります。rho(ロー)〔ρ〕 omicron(オミクロン)〔ο〕 beta(ベータ)〔β〕 epsilon(エプシロン)〔ε〕 rho(ロー)〔ρ〕 tau(タウ)〔τ〕 この文字列に関する数字の値は

$$100 + 70 + 2 + 5 + 100 + 300 = 577$$

同様に、各々の名は、ギリシヤ語の翻訳を連想して確かな数値をもつのです。（ついでに言つと、数に当たるギリシヤ語

は arithmos/arithmos から英語の arithmetic であることが来る⁽⁹⁾。

このすべては、特に有名な指導者が世界情勢に傑出してしていると気が付いた時には、いつでもクリスチャンは彼の名を数えるのが良いことを示唆しています。（特に、もし彼の考え方や計画がキリストに反するものであるなら）。その時、もしその名が666をはじめ出すなら、彼らは彼によって影響を受けないように特に注意すべきです。そして、彼のサタンにつく可能性のある協会に関わる他の人々に警告した方が良いのです。

勿論666の数値を示す名は沢山あるのは明らかですが、ただ一人だけが反キリストなる人物です。例えば、Lyndon B. Johnson はギリシヤ語に翻訳すると、合計666になります。ジョンソン大統領は反キリストではなかった。恐らく一人に一人くらいは名前の文字を合計すると666になるでしょう。獣が指導者を決める方法はそれ自体確かではありませんが、少なくとも用心して、誰であろうと新しい大衆を強く引き付ける統率力を持つ国際的ヒーローとして世界の舞台に姿を見せる人の教えと個人的性格を調べるに当たって、より鋭敏になる動機となります。

666の数はそれ自体意味があります。“6”は完全数“7”より一つ少ないので、また人は第6日に創られたので、数6は人の不完全性と長く関わっています。6が一緒に三つある事は、竜、獣と偽りの預言者の汚れた三位一体を示唆するのかもしれない。

さらに、666は最初の36までの数(1+2+3+...+36)の総和と36は6x6の値であるという興味深い特性を持っています。この「人の数」は、666の数の全体に行き渡り、したがって、獣が自分の数として用いるのにこれ以上ふさわしい数はありません。またヨハネは獣と言う名で彼に対し黙示録で正確に36回言及しています。獣の名の数に対し、ギリシヤ語でイエスの名(即ち、イエス)の数は888である事は何か重大な意味があるはずである。数6はまさに人、特に、罪深い人と罪人と関わっていたように、8と言う数は、第二の人、完全な人、人となられた創造主、イエスと関わっています。キリストの八つの名の一つ一つは、新約聖書で用いられているように(すなわち、「主」「イエス」「キリスト」「主イエス」「イエス・キリスト」「救い主イエス」「主キリスト」と「主イエス・キリスト」)「8」の倍数という数字で示された価値があるのです。最初の人アダムが第6日に創られたように、第二の人イエスは第8日(第2週の最初の日)に甦

られました。

意味ある他の一つの点は、獣の数との関わりで注目されるかもしれない。ある人々が彼の名で、ある者は彼の印で、ある者は彼の数で印（しるし）が付けられるでしょう。聖書は彼の印（しるし）がなんであるかを告げていないけれど、彼の名の数はギリシャ語の数 *Chixis tigma* (x と s)で書かれる可能性が強いです。 x は600、 t は60、 s は6です。これは新約聖書の中で数時666の書き方の普通の方法です。

世界の罪びとたちは、その世紀に現れる反キリストでその数を持たない人々によって完全な破滅へ導かれるでしょう。彼らを偉大な救世主と間違え、人々は極めて有害な破滅への道をとるのです。これら全ての偽キリスト、反キリストの中で、最も偉大な者が、時代がまさに終わる時に現れます。そして、数えきれない人に偽り、彼と一緒に地獄へと連れて行きます。外見上彼は最も魅力的で、明敏で、歴史上最も強い人に見えます。それが反キリストです。彼は、人の中で絶頂に達した長年の進化の過程で最も高い頂上にいる人です。しかし、内面上は、彼は毒のある蛇、残忍な獣、サタン自身の偽りの化身です。創造主は、彼の民が獣に備えて、あらかじめ警戒することを望みます。したがって、創造主は彼がこっそりと世界の舞台に出てくる時、彼を獣と見分けるために私たちのこの手掛かりを慈悲深くも与えているのです。